

京都大学言語学懇話会  
2017年度 発表要旨

## 例会報告

### 第 103 回例会

日時・場所

2017 年 4 月 8 日(土)13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目

「宮古語における無声化の現象と摩擦母音の音韻的解釈」

Celik Kenan (京都大学)

「発話が生み出す現代日本語共通語の語アクセント」

定延 利之 (京都大学)

### 第 104 回例会

日時・場所

2017 年 7 月 8 日(土)13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目

「契丹文字—その解読のプロセス」

大竹 昌巳 (東京外国語大学)

「英語における語強勢と韻律外性—SPE に立ち戻って」

山本 武史 (近畿大学)

### 第 105 回例会

日時・場所

2017 年 12 月 2 日(土)13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目

「発話行為と談話助詞・談話小辞：日本語とドイツ語の対照研究」

Lukas Rieser (山形大学)

「海岸ツィムシアン語における複数について」

笹間 史子 (大阪学院大学)

## 宮古語における無声化の現象と摩擦母音の音韻的解釈

### － 中間報告 －

Celik Kenan

南琉球宮古語のいわゆる「中舌母音」(以下に「ɿ」)については、これまでに多くの議論が繰り広げられ、様々な音韻的な分析が提案されてきた。この分節を扱った先行研究は、A. [s]、[z]に類似する摩擦雑音を伴う(子音的な特徴)、B. 様々な子音と結合し、音節の核を占めうる(母音的な特徴)、の二点において一致しているものの、その音韻論的な解釈については意見が分かれており、いまだに定説には至っていない。

この問題をめぐって、下地皆愛方言と砂川方言における無声化の現象に着目し、k<sub>1</sub>、ki、ku、ka の音節の無声化について予備的な調査を行った。その結果、1. 無声化の現象が従来指摘(「無声子音に挟まれた短母音が無声化する」)よりは複雑である、2. 対象の方言においては、k<sub>1</sub>の無声化の条件、環境や性質が、ka、ki、kuのそれと同じである、の二点が判明した。これにより、\*k<sub>1</sub>由来の音節におけるɿは、それを母音として分析することが望ましいことが示された。

(せりっく けなん)

## 発話が生み出す現代日本語共通語の語アクセント

定延 利之

現代日本語共通語の語アクセントの型は、各々の語ごとに決まっていると考えられてきた。本発表は、この考えが成り立たない2つの場合があることを示そうとするものであった。

その1、大きな区切れの直後の付属語は低アクセントである。これは2つの場合に分かれる。第1は、メタ的なコピュラである。たとえば「いっぱい」は平板型アクセントであり、「いっぱい」直後のコピュラ「だ」は通常高アクセントだが、非流暢に「人がだなあ、いっぱいだなあ、来てだなあ」などとコマギレに言う際の「いっぱい」直後の「だ」は、低アクセントである。これは、この「だ」が「言いたいのは「いっぱい」だ」のようなきもちで発せられ（メタ的とはこのことを指す）、「いっぱい」と「だ」の間には大きな区切れがあるからである。第2は、名詞以外の語句、つまり続かないはずの語句に続くコピュラや格助詞であり、この接続も、大きな区切れを超えた例外的な接続と考えることができる。たとえば「一人で行くのか？」と問われて答える「社長とだ」の「だ」、『田舎者』キャラの「東京さ行くだ」の「だ」、「あっかんべーだ」「いーだ」の「だ」、「行くがよい」の「が」は低アクセントである。

その2、語の中には、心的辞書に登録されていないものがあり、特に、合成語と思わせない短い語の場合、アクセントは頭高型である。たとえば、「エー、ビー、シー、…」のような意味を伴わないアルファベット、「サダ」という字はこう書きます」「シクと読む文字なんか無いだろう」の「サダ」「シク」ように意味を考慮されない文字、「ゆり」「ジョニー」などの2音節以下かつ3モーラ以下のファーストネーム、「キラキラしている」「キラキラ光る」の「キラキラ」のような動詞語幹・副詞オノマトペ、「箱を開ければあら不思議」の「あら」のような副詞的感動詞は頭高型である。

(さだのぶ としゆき)

## 契丹文字 — その解読のプロセス

大竹 昌巳

本発表では、未解読文字の一つである契丹文字（特にそのうちの契丹小字）とその表記言語である契丹語の解読過程について、発表者の研究成果に即して概説した。

契丹人は 10-12 世紀に契丹国（遼）を建国し、自らの言語を記した文字を残したが、その後民族的紐帯を失って姿を消した。契丹小字は 1920 年代に再発見され、70 年代から本格的な研究が始まった。発表では、先行研究による音価推定方法を瞥見し、漢字文献に残る契丹語音写や同系言語であるモンゴル諸語の同源語との比較に基づく音価推定に問題があることを述べて、代わりに契丹小字文献中の漢語転写、押韻、字素の接続特徴の分析を基礎に据えることでより正確な音価推定がなされることを論じた。

次に、推定音価に基づいて再構される契丹語の音韻体系を提示し、モンゴル諸語との音対応規則を示して契丹語先史に生じた音変化を推定した。とりわけ語中において大規模な子音推移が生じたことが注目される。また、共時的な音韻分析を提示し、母音弱化と母音調和について扱った。契丹語では母音調和としての円唇調和が存在せず、舌根調和も極めて制限的である。

続いて、契丹語の形態論について概説した。発表では、名詞曲用語尾と動詞活用語尾について整理し、与位格と奪格の語尾に見られる異形態 /-d(ii)/, /-nd(ii)/, 形動詞過去語尾の異形態 /-br/, /-lr/, 継起副動詞語尾の異形態 /-j/, /-y/ を取り上げ、これらの使い分けが語幹の共時的な音韻条件等によっては説明できないことを見た上で、通時的観点からは、かつて子音語幹・母音語幹の別によって条件づけられていたと推定できることを同源語比較によって明らかにした。また、契丹語はモンゴル諸語と同様に膠着語的性格が強く、専ら接辞添加によって語形成を行なうと想定されてきたが、母音の前舌化という形態法も存在することを述べた。

(おおたけ まさみ)

## 英語における語強勢と韻律外性-SPE に立ち戻って

山本 武史

本発表は、一般に認められている Hayes (1982) の韻律外性 (extrametricality) の概念を用いずに英語の強勢を説明しようとするものである。

Hayes の韻律外性のうちの主なものは語末の 1 子音を韻律外とする子音韻律外性と名詞・接尾辞のある形容詞の語末の 1 音節 (のライム) を韻律外とする名詞韻律外性・形容詞韻律外性である。Hayes は、子音韻律外性により語末に特徴的に現れる超重音節を排除して語末の音節を語中の音節と同じように取り扱い、名詞韻律外性・形容詞韻律外性により名詞・接尾辞のある形容詞と動詞・接尾辞のない形容詞の違いを説明している。

ところが、超重音節は時に語末以外にも見られるので、子音韻律外性を認めると超重音節が語中のみに生じるという奇妙な状況に陥る。また、名詞韻律外性を認めると、語末から 2 音節目が重いにもかかわらず語末から 3 音節目に主強勢が置かれる *á.nec.dòte* のような語の強勢型が説明できなくなる。さらに、形容詞韻律外性が適用されない *-ic* のような形容詞化接尾辞もある。

そもそも、動詞と名詞の強勢の違いは小さく、 $V < VC < VCC < VV < VVC$  という音節の重さの階層を想定して重い音節ほど強勢が与えられやすいとすると子音韻律外性を用いずに説明可能である。

一般に、名詞の最終音節は接尾辞であることが多く、2 モーラ母音を含まない場合は強勢を失う傾向があるが、これは強勢付与において語末音節を無視する Hayes の名詞韻律外性とは異なる。また、名詞化接尾辞は強勢を持っていても無強勢音節のように振る舞う (*e.léc.tròn*)。つまり、名詞の語末音節は、語幹であるものは強勢を持つものと持たないものの別があり、接尾辞の場合は無強勢音節として扱うと、名詞韻律外性は不要になる。

本発表ではまた、英語のフットのテンプレートを  $[\sigma \{(\mu \mu) \sigma\}]$  とする提案も行った。

(やまもと たけし)

## 発話行為と談話助詞・談話小辞：日本語とドイツ語の対照研究

Lukas Rieser

談話標識は近年の形式語用論研究で多くの注目を集めている。日本語とドイツ語には特に多くの談話標識が存在しており、個別の研究は盛んになされているが、両言語の談話標識を対照させる形式的な研究はこれまでのところまったくと言っていいほどなされていない。本発表では、日本語の談話助詞とドイツ語の談話小辞を統一的な枠組みの下で分析することで、談話標識の通言語的な分析および発話のモダリティの普遍的な理論化を試みた。具体的には、まずは日本語の談話助詞「よ」、「ね」、「の」、「だろう」、「じゃん」、そしてドイツ語の談話小辞「wohl」、「ja」、「doch」の用法と、断定や質問などの発話タイプの制限に関する共通点あるいは相違点を確認した。これにより、日本語とドイツ語の談話標識の基本的な意味・機能が類似しているにもかかわらず、どのように類似しているかは容易に把握できないことを明らかにした。次に、発表者が提案する発話行為モデルの下で、日本語とドイツ語のデータから観察される、談話助詞・小辞の基本的な意味の形式化を行った。形式化することにより、談話助詞・小辞の付加によって発話行為が適切に行える文脈がどう制限されるか（談話標識がもたらす文脈の制限）と、談話助詞・小辞が発話行為に付加されて文脈をどう変えるか（談話標識がもたらす文脈への効果）を把握できるようになる。そしてこの形式化の帰結として、それぞれの談話助詞・小辞の基本的な機能からその可能な用法が予測されるだけでなく、意味が非常に類似している「よ」と「doch」、そして「ね」と「ja」の用法の相違点や、ほぼ同じ機能を持つ「wohl」と「だろう」の発話タイプ制限に関する相違点などにも説明が与えられる。

(るーかす りーざ)

## 海岸ツィムシアン語における複数について

笹間 史子

カナダ北西部を中心に話される海岸ツィムシアン語（ツィムシアン語族）は、数種類の重複や接頭辞付与をはじめとする複数形形成法をもち、名詞のみならず、動詞も複数形を形成する。本発表では、まず、これまで形成法の記述に重きを置かれてきた海岸ツィムシアン語の複数形について、名詞を中心に、意味範疇との関係から見直した。その結果、名詞の複数形形成法（CVk-重複、CVC-重複、接頭辞 *ga-*、*dip* など）は名詞の意味範疇（物、人、身体部位、親族、人名、人称代名詞）と関係し、あらわされる「複数」にも幅がある（累加複数、分布的複数、連合複数）こと、それらの複数形は、多少の重なりを示しつつ、名詞句階層に沿った分布を示すことを明らかにした。

発表後半は、「*dip*+名詞」と1人称複数代名詞にみられる連合複数に焦点をあてた。*dip*による複数は、*dip*=Jessie「ジェシーたち」のように、後続する名詞を代表者とするグループをさす。代表者は固有名詞（人名）にほぼ限られ、親族名称、2人称代名詞の例が少数みられるものの、職業や地位を含め、一般の人名詞は許容されない。「*dip*+名詞」、1人称複数とも、代表者の家族、親族、友人、仕事仲間、偶然同じ乗り物などに乗り合わせた知り合いなどが同伴者となるが、海岸ツィムシアン語の連合複数は、同伴者を明示することがきわめて多い点において特徴的である。発表では、年齢層の異なる話者から得られたデータにもとづき、若い世代の話者の連合複数に変化が見られることを報告した。上の世代との主な違いとして、①代表者となる名詞の範囲の変化（名詞句階層のやや上位への移行）、②同伴者の範囲の狭まり（日常的に行動を共にするほぼ特定の組み合わせのみに適用）、そしてそれに伴う③同伴者を表示しない傾向があげられる。

（ささま ふみこ）